

でないと売っていません。特に日本製はそうです。

このように、そう簡単には火災にはならないはずですが、いろいろなケースがあるので、絶対に火事が出ないことはないでしょう。団地が519戸あると、数戸くらいは火災になると思って準備をしようじゃないかという結論になっています。ただ、9ページの上段にあります、「大火災、延焼火災があるだろうか」ということ、これは「ない」と言い切りました。

これは私の商売のところですが、普通の方は鉄筋コンクリートのマンションでも延焼火災があると思っています。棟から棟へ燃え移ることもあるのではないかと本能で思っているところがありますが、そうではありません。こういう構造になっていると、絶対に棟から棟へは燃え移らないのです。

私もこういう商売をしているので、公団の方とも一緒に実験をしましたが、上階延焼も非常に難しいです。上階延焼をさせようと思って、取り壊すアパートの1室に可燃物をたくさん持ち込んで、ベランダには布団を干して、さらに上階にも布団を干して、窓を開けっ放しで、カーテンをゆらゆらさせて、それで火をつけてもほとんど上にはいきません。あれを見ると、これはなかなか延焼させるのは難しいなと思います。延焼させようと思って火をつけても延焼しないわけです。それでもいろいろな条件が重なると、延焼することもないわけではありませんが、「普通につくった普通の共同住宅では上階にはまず延焼しない」と言い切って皆さんを安心させました。

□津波の心配はありませんか

津波も、うちの女房なんかはすごく心配をしています。「こんなに海のそばにいて大丈夫か」ということですが、よく歴史を調べると、太平洋側が三陸沖からずっと四国までありますが、東京湾の湾奥はその中でも最も津波の被害が少ないところ。富津や三浦半島のところで、いったん狭まった後で広がっていることがラッキーなのではないかと思えますが、他のところと比べると津波の被害は少なく、関東大震災で1mちょっとくらいです。津波については本当かなと、私自身も半信半疑なところがあり

ますが、歴史を調べてみると東京湾奥では1mか1m20cmくらいで、東京都の地域防災計画や浦安の地域防災計画でも1m前後で考えています。

□活断層の心配はありますか

活断層は、調べるのがなかなか難しいのですが、いろいろな資料があります。東京湾北部断層や荒川断層がありますが、堆積層がぶ厚くてなかなかわかりません。たぶん活断層はあるのではないかと。これも危ないほうに考えたほうがよいのではないかと思います。

● 体験的コミュニティ防災論〈2〉 ●

3ページに戻ってください。こういうことでいろいろなことを検討して整理をしますと、下から2段目に、1として「建物が潰れて人が死ぬことはまずないだろう」とあります。しかし、2として「壁や床に亀裂が入ったり、外階段の踊り場が壊れたりするような被害はかなりある」のではないかとあります。それから「建て替えが必要になるほど壊れる建物もいくつかあるかもしれない」「液状化で建物が傾く可能性はある」「噴砂噴水現象によって敷地が沼地のようになるとともに地盤沈下を起こしてガス管や水道管の建物への取付部分が破損する」「敷地内に埋設された水道管、ガス管、下水管が液状化によりいたるところで破断する」「ガスの遮断が適切に行われなければ埋設ガス管からのガス漏れによる火災や爆発の恐れがある」「電柱や街灯は液状化で倒れる可能性が高い」「水、ガス、電気、電話は当分使えない」「家具の下敷きになったり、落下物に当たって死んだりケガをする人がかなり出る」「ドアが開かずに閉じこめられる人が出る」「火災は2～3件発生するかもしれないが、大火にはならない」「津波を心配する必要はない」。こういう状況だと「全員が指定避難施設に長期間避難するような事態にはならないのではないか。ただ、地震後の最初の夜はかなりの人が避難施設に泊まることになるかもしれない」「火災発生住戸や破損のひどい住戸の人たちは数世帯かもしれないし、あるいは数十世帯になるかもしれないが、

ある程度の期間避難施設で宿泊する必要があるかもしれない」。このように整理をしまして、それではこういうことが起きるんだったらどうすればいいのかということが次に考えることです。

□大地震が発生したときにどうすればよいか

いろいろ考えたわけですが、どんな場合でも必ずしなければいけないことは、ここに書いてある3つではないでしょうか。①家具等の下敷きになっている人の救出、②火災が発生していれば、その消火と住民の救出、③けが人の手当と重傷者の病院への搬送の3つです。

これをどうやってやるかということですが、それをいろいろ議論をして、4ページに手順を書きました。これは防災計画で、また後で皆さんに知らせましたが、①その時に住戸内にいた家族等が相互に状況を確認しあう。「大丈夫」かということです。

②火災が発生をしていたら、まず消火を試みる。まず、「何よりも消火だ」と。とりあえず消すことを試みてみないと、火が燃えたまま救助活動をしたのでは、ちょっと時間がかかると、そのまま焼け死んでしまうかもしれませんから、まず消火を試みて、それから③家具等の下敷きになっている家族等を助け出す。

④応援が必要な場合は活動をしながら大声で助けを求める。マンションのようなケースでどのくらい外に聞こえるのかはよくわからないところもありますが。

それから④脱出に成功をしたら、大声で隣近所の人々と状況を確認しあう。⑤家族等がとりあえず無事だった人は、隣近所で助けを求めている人を応援する。⑥同じ棟で応答がない住戸については、戸をたたいたり大声で声をかけたりして積極的に状況を確認する。特にお年寄りだけの家庭は必ず確認をする。それから⑦負傷をしている人がいる場合はとりあえず隣近所で助け合って手当をする。

⑧からがまた重要だと思います。⑧棟の全員が無事であった場合も、消火や救助で応援が必要な場合も、死傷者がいる場合も棟の代表者がとにかくできるだけ早く管理組合集会所に行き、その状況を防

災部に報告をする。その際に途中で火災やガス漏れの発生や建物の破損状況や水道管の破裂などがあれば防災部に報告をする。

それから⑨隣近所に急を要する救助・消火の事態がなくなったら手の空いている人は声をかけ合って、できるだけ早く管理組合集会所に集結をして防災部の指示にしたがって以下の活動を手伝う、としました。

救出や消火の応援、これが結構重要ですが、消火、救助、救急用具等の貸出です。それから報告がない棟の状況の確認、手伝える人の増強・確保。重傷者がいる棟の手当の応援、運ばれてきた負傷者の手当、重傷者の病院への搬送、搬送者および搬送先のリストの作成、避難所の開設、これは中学校です。それから全住戸の安否状況リストの作成、消防や市との連絡、状況報告、団地内外の状況の把握、これは団地の中がとりあえずわかっただけ外はどうなっているのか、旧市街地が燃えているか、などということを探るに行くということです。それから各種記録の作成、掲示、団地住民への状況説明、このようなことではないでしょうか。

防災部のメンバーは40～50人いますが、とにかくなるべく早く管理組合の集会所に集まります。自分や自分の家族が負傷をしたり、死んでいたりしたらもちろんできないわけですが、無事であればなるべく早く管理組合の集会所に集まって、ヘッドクォーターとしての役割を果たします。消火班や避難誘導班のように、班ごとに細分化して実働部隊を編成するのはナンセンスです。実働部隊としては、応援に駆けつけてくれた人を使えばよいということです。情報を集中して必要な指示を出し、その結果をまとめて住民に知らせることが、大地震が発生した時の防災部の仕事だと割り切ったわけです。

このようにストーリーができたわけですが、この中で一番議論をして私の意見が入れられなかったのは、⑧です。棟の全員が無事だった場合も、消火や救助で応援が必要な場合も、とにかく棟の代表者が管理組合集会所に行くというストーリーにしていますが、私は「地震があったら、その家族ごとに一度

管理組合集会所に報告に行くとしたほうがよい」と言いました。そうすると、例えば4人家族なら4人で、今はこの団地には3人しかいないが3人全部無事とか、1人はどうかということがわかります。それで行くことによって、無事な人たちは一度管理組合の集会所に集まってくるわけですから、その人たちを使っているのと救助活動などができるわけです。棟単位で行動をしようとする、他のご家族の人の状況はどうしても不正確になるし、行く人が少なくなるので反対でしたが、「とりあえず中央に集まるよりも、隣近所の顔見知りの人たちを助きたい」という人のほうが圧倒的に多くて、私の意見は入れられませんでした。

帰ってきて、うちの家族とも話をしましたが、私の意見はいわば中央集権的です。中央に一度話を持って行って、そこでみんなで考えて必要な対応をしようと考えましたが、他の皆さんは地方分権的で、それぞれ個別に対応し、一段落をしたら中央に行けばいいじゃないかと言う説です。家族にも「それはいかにも役人的で冷たい」と言われて一蹴されました。私のほうが合理的で正しいと未だに思っていますが、多勢に無勢でしかたがありませんでした。

□地震の後の防災部の役割

4ページの5で「地震の後の防災部の役割」がありますが、地震直後の対応が一段落すると、その後は状況を市役所や消防に連絡することもありますし、団地の外がどうなっているのかを住民に知らせることもあります。死者が発生をした時は消防や警察に連絡をすとか、葬儀なども必要になります。避難所を開設して市役所と折衝をすとか、毛布、水、食料、照明、燃料等の確保を行うとか、手に入れたらそれを今度は公平に分配するという大変な作業があるので、その時にルールをどうするのが問題です。若干ハンディのある人も、お年寄りを含めていらっしゃるのです、そういう人たちをどうするのかということをやっていかなければなりません。これはあらかじめ「何班」とつくっていても容易ではありません。それよりも「いざと言う時には、この人たちの言うことは聞いてくれ」というルールだけを決

めておいて、みんなで相談をしながら考えるほうがよいのではないのでしょうか。マンパワーが必要なので、これは各種のサークル、うちの団地には、ゴルフ部、釣り部、バレー部といろいろありますが、そうしたサークルで集まっている人たち、特に女性が大きな役割を果たすのではないかと考えています。

□「防災部要綱」、「防災マニュアル」と「防災計画」

こういうことがありまして、防災部要綱をつくって防災部を発足させましたが、これも部長を1人にして、副部長を何人か、なるべく団地にいる確率の高い人を決めておこうということにしました。

5ページの左上に班編成について書いてありますが、やっていると班編成はいるのではないかという気がしてきました。私が先ほど言ったようなことを臨機応変に、ヘッドクォーターの部長や副部長が状況によって考えるなどということは、普通の人にはどうも難しいようです。部長、副部長は60歳代の人たちに頼っていますが、「ちょっと無理だ。自分1人で、あるいは2～3人でこんなことを考えることはできない。それよりも班にして仕事を分けてしまっ、肩の荷を下ろしたい」と言われると、それもそうかなと思いました。

事前準備の段階では、物資がいろいろあります。例えば5ページの2段目にありますが、非常時に使用するいろいろなものがあります。水や食料もありますし、名簿や掲示用の模造紙など、雑多なものがあります。そういうものを準備していますが、すぐになくなってしまいます。

例えば、模造紙は情報を張り出して共有化するためには不可欠ですが、お祭りの時に「模造紙がないか」と言って持っていき、使ってしまったら補充をしておかなければ、いざという時になくなってしまいます。ですから、1年に一度必ず点検して、なくなっていたら補充することを決めておかなければいけないわけです。それは誰の責任でやるのかを決めておかないと、いずれなくなってしまいます。乾電池もそうです。単一乾電池100個と置いておいても、懐中電灯の電池がなくなったら使ってし

まって補充しておかないと、どんどんなくなってしまう。そんなことだけでも、担当者を決めておかざるを得ません。あるいは、団地の中に元看護婦さんとかいろいろいらっしゃれば、そういう人たちを中心にして救急救護班をつくるのもよいと思います。消火班や避難誘導班はナンセンスだと思いましたが、消火・救助資機材班や、生活用資材班や情報収集・整理班とか、そういう感じの班編制をしたほうがよいということになりました。なるほど、やっているとそれはそうかなという感じがします。

おわりに

というわけで終わりに来ましたが、今まで私がお話ししたのは、団地では大体そうかなと思いますが、かなり恵まれた条件の下での「特殊解」という感じはしています。構造を見ても、壊れるけれども潰れることはないという条件が揃っています。火事が出るかもしれないけれど、大火にはならないという条件もあります。それから、3階建てですからエレベーターがない。オープンスペースがたくさんあるというのも有利です。そういう意味で、これは「特殊解」という気がしています。

ここで言っている「一般解」は、まず大地震に襲われたら自分の町でどんなことが起きるのか、どのようなことが起こらないのかということを中心に考えることから始めるべきではないかということです。そういうことをきちんと考えると、途中でいやになってしまってやる気にならないことも本当はあります。

実は私は今年の3月まで、静岡県で防災対策を考える防災局の技監という役割をしていました。県全体のことを考えることも私の仕事ですが、自分の住んでいる町内会の防災対策も少しやりました。官舎のある町内会の新年会に行き、「実は私はこういう者です。東海地震も切迫しているので、一緒にやりましょう」ということを言いました。非常に喜んでくれましたが、「ではどうしようか」と思って考えると、これは大変です。我々が住んでいるところは官舎ですから鉄筋コンクリートなので、とりあえず大

丈夫だと思いますが、隣の家はいつ壊れるかわからないような木造住宅で、それが周り中並んでいます。それを火災は？倒壊は？と一つひとつ考えていくと、とてもではないけれども答が出ません。オープンスペースもあまりありませんし、これは途中でやめてしまうのも無理はないと思いました。

ある程度の水準までいっていると、その先を考えると、水準が低すぎると、運を天に任せてしまうことがよくわかりました。それでも、そうも言われていられないので、私の持っている知識をいろいろ皆さん方に伝授して、「こうしたほうがいいですよ」ということを言ってきましたが、普通の町の中でこういうことを考えることは実は非常に難しいと身にしみて思いました。

□トイレの問題

最後の12ページにトイレの話が書いてあります。言い忘れましたので、後で読んでいただいてもよろしいかと思います。

トイレは非常に大変です。神戸の時にもトイレの話が一番でした。1～2日食べないでいても何とか耐えられるという感じですが、1～2日トイレに行かないでいるというのはなかなか我慢ができません。特に女性の方は大変だと思います。

この問題もだいぶ勉強しましたが、簡易トイレというのがありまして、大体の市町村では工事用の簡易トイレを備蓄していますが、あれは300～400人が使おうと、あとはてんこ盛りになってしまっていて大変なのです。微生物で分解するタイプのものがありまして、これは1基で8千人分使えます。1週間くらいは大丈夫です。本当に役に立つのはこういうものだと思います。トイレを団地で備蓄しておくのは大変だということで、いろいろ考えました。

12ページの下から2段目に③がありますが、団地の中にマンホールがあります。このマンホールを開けると結構な空間があります。ここに仮設トイレを設置するとよいのではないかと考えました。これは、普通の町の中だとマンホールを勝手に開けて上に仮設トイレをつくってしまうわけにはいきませんが、団地だと中に車が入ってこないようになっています

から、そういうものをつくらうではないかということで、防災部をつくった後にトイレをつくる練習をしました。まず、マンホールを開けて、それから備蓄しておいたベニヤ板を、パタパタと個室型につくって、便器を準備しておいて設置するわけです。そういうこともやっています。

それから、訓練で炊き出しの訓練もやりました。市で自衛隊が使っているような炊き出しをする竈みたいなものを備蓄しています。灯油の燃料でご飯が100人分炊けるもので、だいたい全国同じようなものだと思います。団地のお祭りの時に、「せっかくだから市で備蓄している炊飯器を借りて、使ってみようじゃないか」と言って、使ってみました。そうしたら、あれは最悪だということがわかりました。まず、新しいものは油の匂いがします。錆びないように油が塗ってあります。それを水で洗わないと、とてご飯は炊けません。平常時は水があるからまだよいけれども、本当の地震の時は水なんかありません。また、あの炊飯器は、自衛隊が使うものなの

ですが、自衛隊があればなぜうまくたくさんのお米を炊くことができるのかということ、食事当番がいるからです。食事当番は熟練していますから火の加減もわかるし、うまく炊けるわけですが、初めてやってみればうまく炊くことはできないことがわかりました。

市の防災担当者は、2～3年で異動してしまうので、具体的なことをあまり知らず、また、あまり良く考えないで備蓄資機材をそろえているようなところがあります。

住民としては、実際に使ってみたりしながら、必要ならどんどん意見を言って、市の行政をリードする必要があると思います。

私どもの団地はこうして市に協力したり、意見を言ったりしていますから、市の防災担当の人はいざという時もきっと意識してくれるだろうと思っています。そんなことが地震の時にも役立つに違いないと思います。

時間も来ましたのでこれで私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

